

『技能訓練』 1962年9月（発行元不明）

## 【講演】若年層従業員の職業観と生活意識 その1

国立教育研究所 矢 口 新

### 企業と人間教育の問題

最近経験した例をはじめに申しあげて、こういう問題がどこに原因があるのか、あるいはこういう問題を、どういうところに原因があると考えているのかということについてお話してみたいと思います。

最近、私はある鉄道会社の現場の第一線監督者の講習で、ここで話しするのと同じような事をお話しする機会を持ちました。鉄道の工場とか検車区というのは、ごく小さい5～10人の単位で第一線の仕事をしておりますが、その区長、副長という人たち——その仕事は電車のお尻を覗いて運転することが出来るように背後で仕事をしている人たち、あるいは駅で仕事をしている人たち——が部下にもっている若い青年たちの生活意識は、いったいどのようなものでどう指導したらよいかという事の問題について話しをするようにとのことでした。その講習の問題点は基本的には、最近、若い高卒者がたくさん入社してきたので、第一線監督者がそれらの人々の取扱いにいろいろな問題を持ったということです。

ところが、私が驚いたことは、その第一線監督者の教育をいまだやった事がないという事です。生れてはじめて私の話の内容のような事を聞いたというわけです。それを聞いて、日本の企業というものはいかに人間の教育の問題について目をふさいでいたかという事をしみじみと考えさせられました。第一線監督者となり若い人たちを5人～10人と纏めて仕事をしていくことが出来るという考えに、私は企業の全体の人間に対する考え方が間違っているのではないかと考えました。

そこで、若いものの考えについて出来るだけ具体的な例を挙げて話したわけですが、それに対していろいろと質問があったなかで非常に面白い質問がありました。それは非常に困った様子で質問されたのですが、たとえば仕事は朝の9時から始まっているのだが、若い者はだらだらして仕事を始めようとしない。自分たちの若い頃の事を考えると、どうも気が合わなくて腹がたち、殴りつけたい気持ちになるけれども、あまり強く言うと若い者から“労働者の敵だ、などといわれるとビクッとしてしまう。したがって、そう言われるのは自分もいやだから、言いたいのを我慢してじっとしている。その素朴な質問のなかでその人たちのもっている悩みがわかったように思いました。ごく些細なことですが、その背後には企業の経営者として考えなければならぬ問題があると思います。実はそこに最近いろんなところで採りあげられている民青同の問題がからんでおりまして、そういうことから起こってくる問題があるので、経営者はあわてて講習をやって対抗しようとしているのだと思います。しかし、そういう民青同の問題以前に、もっと根本的な問題があり、それが質

問にあらわれていると思います。

職場に入って3カ月ぐらいの技術訓練を受けた後は、その職場で10年や20年、場合によっては30年も電車の尻ばかり見させている。そして職場におけるものの考え方、人間についての考え方を教育しないでやらせている。これでは、たとえ一定の年限を経て若い人を指導する立場に立ったとしても、自分の住んでいる社会に対してどれだけ深い認識をもつことが出来るか、どうして若い人を引っばっていきける実力がついてくるだろうか。ただ、仕事の形式的な定められた職場規律のようなものだけで仕事をしている。そうして年功がつけば指導者になるのであるが、それで若い者が指導出来るだろうか。私はここに大きな問題があるのではないかと思うのです。そういう事がひいては若い人たちをその職場に対する魅力を失わせる何かを感じさせ、そこから別なものを求め、別な場で別なものの考え方を、追求していくという考え方が生じるのも当然ではないかと思います。

日本の企業内における教育というものを考えると、技術の面だけが考えられております。内容が技術ばかりでなく教育そのものがテクニク的に考えられております。これだけのものを教えたからそれだけ経済効果があるというように、教育は簡単に割り切れません。人間がもっているさまざまな社会関係、奥深い内面の精神的なものがある、それが伸びていろいろな雰囲気を出してくる。そういうものが、また全体としての職場というもののあり方をきめてきて、それがまた個々人の人間に逆に影響して、能率を上げたり下げたりするという事があるわけです。そういう方向のことを日本の企業は考えていなかったと思うんです。いまの鉄道の例では電車の尻のつき方を教えておけば、その後は定めた規律にしたがって行動すればよろしい、という割り切った考えで人間をみている。それは結局、人間というものを労働を提供するものと見て、人間性を見失ってくる事になる。その結果、そこで育ってくる労働者たちは、まったく人間的な成長がない。そういう人が若い者を指導することが出来るのでしょうか。若い者もそういう先輩に失望し、もっと人間的なものを求める。そういう事がさして経済と関係しないような民青同のモットーである。楽しく歌っておどって恋をしてという、そしてその間に思想を養っていくという運動に押しまわられていく結果になる。そこに、やはり表面的な労働とその報酬というような関係以外、あるいは技術という以外に人間が持っている内面的なものがあって、その生活というものを作りあげている。労働や技術の提供という事も内面的なものが基礎として表面にあらわれてくるということを示しているのではないかと思います。最近、多くの企業体が民青同の問題をとりあげてきましたが、これは非常に良い事だと思います。その事により経営者が人間の問題を採りあげるなら、それに越したことはありません。この意味で、民青同は良い貢献をしているといまのところ、私はそう考えております。

青年の生活意識とか職業観をみると、そしてそれを企業の経営の中の、またその中の教育の問題でありましょうが、その教育の中に生かそうとする場合にも、単にいままでの形で若い人はこういうものだと定め、だからこういう取扱いをすればよいと、テクニクとして考えるという事であるならば、これは出来もしませんし、また間違いだと思います。人間は意識という面に入りますと、単にこうだと定められるものではありません。人間この不可思議なるものという言葉がありますが、若い人はこうだと簡単にいいきれないのです。いまの若い人はなんだ、といういい方を

しますが、これは無責任ないい方で、自分の関係するごく狭い範囲のところで見ればこうだ、とその経験をいっているだけであります。広く多くの若い人を扱った時に、そういう単純な、自分の狭い経験から出てきたものでもって、それを律してものを考えるということは出来ませんし、そういうさまざまな青年をいっただう見るかという事で、だんだん見てゆきますと、まずわからなくなってくるというのが本当であります。むしろ、現在、われわれが持っているさまさまの科学的な方法論を使って青年を見ていくという、その過程が大事なのであり、そしてそこに一人一人の人間が発見され、その人間をどのように指導するかという事になってくる、青年の生活意識とか背景あるいは人生観というものも、従来のような人間に対する考え方を取扱いの技術に重点をおいたら、なかなか解決しないだろうし、また非常な誤ちを犯す結果になるのではないかと考えます。

人間を見る問題を掘り下げていくという事は、みんながお互いに人間を見つめあうという事の中から、良い人間関係をつくりあげていくという事ではないかと思えます。私は、科学（社会科学）というものは本来そういうヒューマンイズムとの関係において存在するものだと思いますが、そういう意味で若い青年は何をどう考えているのか、それはいっただういう事情に基いているのかというようなこと——これもさまざまな事実の一端であり、簡単にこうだというように言い切れるものではありませんが——むしろ、そういうものを通じていろいろな青年を見る見方、考え方に重点をおいて考えた方が良いのではないかと思えます。

### 勤労青少年の職業観生活観

これは全国の教育研究所の方々が、昭和35年に調査し、まとめたもので、調査対象は満19才の青年男子2,000人ですが、属している企業は大企業もあれば中小企業もあるわけです。主として工業に関係する青年のものの考え方を聞いてみたわけですが、いろいろな項目について尋ねたわけですが、その中から仕事に関係する事を観察してみたいと思えます。（調査表参照\*）

\*ライブラリ編集部注

調査表参照とあるが、調査表は保存されていない。発行元を調査中で、確認でき次第追加収録する計画である。

こういう項目について尋ねてみたとしても、それが必ずしも青年の考え方を決定づけるわけにはいかないものでありまして、とくに大量観察であなたはどうか、という質問の答えも、こう思う、と答えても、それにはいろんな状態で、どういう問題がでて、どう答えるのか、あるいはどういう心理状況でそれに答えるかというような事についても、それは個人によって違うかもしれないし、そういうものを大量観察でまとめてありますので、必ずしもはっきりと実態をつかんでいるとはいえないのですが、ただ、私はそれを使ってものを考える、われわれが青年を見る一つのヒント、筋を得るという事が大事ではないかと思えます。

はじめに、仕事についてという項目で調査したまとめを紹介しますと「あなたの仕事は興味があるかどうか、仕事について興味を持っているかどうか、たいへん面白いのか、やや面白いのか」というように聞いています。非常に積極的に肯定している方、強く否定している方、その中間の欄を肯定側と否定側とに分けて聞いているわけです。どれも、だいたいこういう形で4つに分けて聞いているわけですが、それでどれだけほんとうの事がわかるかという事はなかなか難しい事があります。

次に「仕事はやさしいか、難しいか」ということで、これも本人の思っていることなのですが、思っているかどうかを本人に聞くわけです。

ある人は難しい仕事でもやさしいと思っているかもしれないし、また出来もしないけれどやさしいと思っているかもしれない。これはいろんな考え方が出来ますが、仕事に対する一つの緊張度というような事とみるというふうを考えられるでしょう。満19才の男子とえば、だいたい職業生活に入ったとたんの子どもたちですから70%が難しいという方に答えています。しかし、やややさしいというのは、裏返せばやや難しいという事にもなりますが、やややさしい、やや難しいを合せてこれまた70%になりますから、そういうように考えますと、仕事に歯が立たないわけではなく、劣等感ばかりあるわけではなく、自信ももっていると考えられます。

それから、「仕事がらくか、らくでないか」と尋ねますと、たいへんらくだという答えは少くて2.3%、らくな方31.4%。また、そういう事を全部含めて、違った角度からみたのが、「いまの仕事はやりがいがあるかどうか」ということです。これも、いろいろ環境との関係で、いろいろな答えが出てきますから、必ずしも個人だけのものの考え方だけを見ているという事は出来ませんが、そういう傾向が出てくると思います。

こういう方法でもって答えを求めるという事はなかなか難しく、みなさまが聞かれる立場になったら、自分がこれをどうするかというふうにお考えになったらわかると思いますが、答える方になりますとなかなか難しいものです。本当のことがどのくらい出ているかという事は、なかなかわからない事ではありますが、そして、こういう事を考慮に入れた上で考えるわけです。具体的には職場が悪くて、この職場ではいやだという事が仕事にやる気を失わせているところもありますから、ただ、これは青年だけの問題だという事に考えなければ、だいたい7割というのが仕事にやり甲斐を感じているようです。非常にやり甲斐を感じている人が多ければ多いほど良いのですが、なかなかそうとはいかないのではないのでしょうか。たとえば、つまらない事をやっているとお考えになっていられる方もあるんじゃないかと思いますが、また、やや面白いと思う方も、面白くないとお考えの方もあるかもしれません。また、そういうふうにと考えると、だいたい青年といっても、おそらくそんなには違わない精神状況にあるというように考えてよいのではないかと思います。前にあげた仕事の難易というような事でも、あんまりやさしい仕事ばかりやるのは、けっして良い事ではなく、やや難しいくらいのところが一番本人にあった仕事でしょう。われわれでもそうですが、非常に難しいとへこたれてしまうわけです。やや難しい、やややさしいというところが、自信をもって出来るという非常に微妙なものですが、そういうところで仕事をしていくというのが一番良い状態にあるといえるのであります。その点から見れば、表の2と3のところによくの数を集まっているという事は、けっして悪い傾向状態であるとはいえないのではないかと思います。

次の、仕事がらくかどうか、ということについても、やはりそういうことがいえるのでありまして、非常にらく、という答えでは困るんでありまして、けっして本人の持っている意識としても良い事ではない。非常に疲れる、ということも、意識的にそう思っている事も良くない事であって、だいたい80%が中間のところにいるので、まあ普通のところで普通の状況で仕事をして

いるという事がいえるのではないかと思います。

このように見てみますと、子どもはよく青年は大人と違うんだという事を聞きますけど、このような聞き方をすれば、たいして大人と違わないんだというふうに考えた方が良いと思います。あまり青年を特別扱いにする、とくに青年は何を考えているかわからないという考えには、うかつには同調しない方が良く私は思います。事実、こういう調査と合せて、子どもが青年個人個人にあって、話をしてみましても、だいたい青年は妥当な考え方を持っているというふうに子どもは見ています。

次に、収入の事について聞いたのがありますが、いまのは仕事の収入は、いったい良いのか悪いのかということです。非常に良いか、まあ良いか、あまり良くないか、悪いか、と聞いたわけです。収入の良し悪しと実際の良し悪しと違って、自分が良いと思っているかどうかという事です。結局、非常に良いと思っているものはあまりないわけですが、まあ良いというのはいろいろな条件があるわけですが4割弱、あまり良くないというのも曖昧といえば曖昧ですが4割でみなさまのところとたいして違わないと思いますが、これをみなさまが聞かれたとしても、非常に良いとは答えられないし、悪いとも答えられない、まあ良いか良くないかのどちらかではないかと思います。そういう答えを合せると80%近くになりますが、そういう意識においてあるという事がいえるのではないかと思います。

それから、仕事がつらくても収入が第一と考えているのか、これはなかなか難しいところですが収入を非常に重視しているかどうかということを知りたいわけです。いったいそれに対してどう答えるかということ、仕事がつらくても収入が第一だと思っているのは約1割で、あまり思わないという答えが半数を占めています。同じようなことですが、別な側から収入よりも、むしろ自分の個性とか趣味を生かせるような職業につくという考え方についてはどう思うか、については、自分の個性とか趣味を生かせる職業という考え方について、本当にそう思うと答えているのが約5割、そんな気がすると答えたもの3割で、両者を合わせると約8割で、自分の事を考えるというの、金で考える、収入で考えるというのもあり、自分の個性とか趣味とかいうようなもので考えるというのがあります。物質的と精神的に分ければ、収入はむしろ物質的ですが、青年は精神的だというふうになる事があるかもしれません。どちらに重点をおいているかといえば、収入よりは物質的でない方へ重点をおいているという事ができます。いまの青年は非常に打算的だとよく大人はいう事がありますが、こういうふうなところからみると、必ずしもそういうふうには考えていないともいえるわけです。

考え方によっては、個性や趣味の方に重みがかかり過ぎているという事も出来るかもしれませんが、昔の人はかなり年をとってから、自分の個性とか趣味とかを考えてきました。若い頃はメクラメッポウに使われ、これを人生だと思っていました。そして、収入を一生懸命に求め、あるいは収入はなくても、働く事その事に精神を没入した人も昔はたくさんいます。収入なしということなんですけど、徒弟などというのは10年間も収入は殆んどゼロに近い小遣いだけでやったのがありますから、そういう過去の時代における過去の人の考え方というものを考慮にいれますと、いまの青年はぜいたくだという事も考えられるかもしれません。若い満19才の頃から、収入よりは個性とか趣味だと

かいうようないい方をしたら、あるいは小企業の親方は怒るかもしれません。生意気いうな、俺の若い頃は10年間もただで働いたんだ、という人に実際にぶつかった事もあります。自分の事を考える事を打算だといえば、これも一種の打算といえば打算なのかもしれません。しかし、それは現実的にただ収入だけ増やせば良い、収入のためにどうするという事における打算とは違うわけです。

それと合せて、さきほど紹介した、仕事がつらくても収入第一という考え方、これもないわけではなくて、それについての項目では27%がそういうふうに考えています。だいたい、そうは思わない、というのが多いわけですが、そういうのもまた全体の30%を占めています。全体の30%というのは一人の人間の中で考えれば、心の中に3割ぐらゐは占めているといえます。なんととっても収入がなくては話にならないという事もあります。収入が第一という事でも、考えてみればいろいろ条件があるわけですし、企業がつぶれて収入がなくなったというところで、いくら一生懸命やっても収入がなくてはしょうがないから、収入が第一だという考えもありますから、これも一律的になかなかそう簡単に収入が第一と考えているという事は出来ないのであります。そのような収入の要素というものを、ぜんぜん問題にしてないわけではなくて、約3割はその心が1人の心の中にもあり、全体としても3割ぐらゐはそういう事をかなり重要視する人間がいるという事は、やはり考えておかねばならないと思います。このようにみますと、いまの青年がたいして収入という事に対して極端な考え方をもっているのではないという事がわかるわけではないかと思っています。

次に自分の仕事の腕を上げていくというか、勉強していく事について、いったいどのように考えているのかという質問で、これも、いまの青年は勉強する気がないとかいいますが、勉強というのもしろいろありまして、昔のようにこき使われる事を勉強だと考える人もあり、さまざまですから、いまの青年に対してそういう考え方に基いて、いまの青年は勉強していないというのは、いちがいはいえない事でありまして、青年自身はどう考えているか客観的に青年を見たとき、青年が勉強しているつもりだと思っても、われわれがそれはまだ勉強しているうちには入らないと思う事もありますから、これが青年の事実だというふうに考える事は出来ないと思います。青年自身は、どう考えているかという事をみまると、仕事の腕を上げていくという事について青年自身は大いに努力していると考えているのか、努力していない、あまり考えたことはないというふうに自覚しているかどうかという事を聞いたわけです。これも、もし、われわれが本当にあなたは努力していますかと聞かれて、大いに努力していると答えるのには、そうとう心臓が強くないはいけない。まあ、普通の人は「まあ、やっている方でしょう」と大人しく答えるでしょう。われわれですと微妙なところがありますが、青年はどうでしょうか。仕事の腕を上げるという事は、あたりまえの事で特にそういう事を考えないけれども、やっているという事実もありますから、そのように考えてくると一義的には解釈できないもので、難しい事であり、だいたいの傾向としてみれば、大部分が努力しているという事なんだというふうに考えていいわけです。その表現に大いにというのあれば、努力しているというのものもあるし、まあというのものもあるけれども、普通やっているというのが半分近くあってそれが普通だと思われまゝ。

青年の意識についてはそういうふうに考えています。学校を卒業して、職場に入った途端のところでもありますから、とうぜん、そうあるべきだと思います。その仕事をしていく事に努力をしてい

る努力の結果、どうなると考えているのか、仕事の腕を上げる事が出来ると考えてやっているのかどうか、これは、きわめてあたりまえの事です、努力すれば必ず仕事の腕を上げる事が出来る、あるいは多分出来るだろう、あるいは努力しても出来ないだろう、あるいは努力しても出来ない。自分の勉強の結果についての見通しだという事が出来るわけでしょう。そういう聞き方をして、本当ならば、もちろん努力すれば必ず出来ると思ってやっているというのが本当だといえましょう。それはどういう状況で答えているかという「努力すれば必ず出来る」というのが7割強、「努力すれば多分出来るだろう」というのが2割5分で、これで大部分を占めることになりますから、ほとんど全部が努力したら出来ると考えてやっている、見通しをつけてやっている、だから努力しているんだという事が言えるわけです。

仕事の腕を上げるための方法としては、どういう方法を採用しているのかというと、これはなかなか難しく、上役や先輩や仲間に教えてもらっているもの64%、いままでの経験を基にして自分で考えているもの16.1%、なにか特別な研究会みたいなものに参加するもの1.3%、学校の通信教育みたいな形で勉強しているもの2.3%、その外の形で勉強しているもの2.1%、べつに努力していない、方法についてとくに努力していない、あるいはどうすれば良いかわからない5.2%。仕事の腕を上げるための方法としては、まわりの人、先輩と仲間が一番多いわけです。さらに勉強の仕方として、経験という事が非常に大事かどうかについて聞いたのがありますが、仕事には本を読むより経験だとして、経験を尊重するというふうに考えられるわけですが、これも経験を尊重するという事は職場の先輩を尊重するという事と繋がってなかなか面白い事です。仕事の腕を上げるには非常に経験が大事だという考え方について、本当にそう思うというのが54%で、これはおそらく若いものにとっては実感ではないかと思います。学生はこういう答えは絶対にしないと私は確信をもっていう事が出来ます。経験のないものは、心臓ばかり強く経験というものを尊重しないのでありますが、職場へ入ってしばらくするとそういう事を強く感じます。職場へ入った直後の青年の実感としてはよく出ているように思います。

いまの仕事を進めていく上に勉強は必要であると思っているのか、いないのか、一般的な聞き方がありますが、大いにあると思っているもの47%、ややあるもの28%、あまりないもの19.6%、まったくないもの3.9%で、よく若い人は勉強熱心でないといいますが、それは客観的にみるとそうかもしれませんが、本人自身ではやはり必要は大いにあると思っているという事です。それでは勉強するための機会や条件に恵まれているのか、恵まれていないのか、それとも関連してこういう事を尋ねたところがありますが、この事に対してどう答えているかという、これはなかなか面白い一つの傾向を表していると思います。恵まれていない方というのが非常に高くなってきているという事です。これは、いまの職場の状況を表わしているという事が言えるのではないかと思います。

そういう答えをみると、一般に勉強という考え方を持っているかというふうにとみると、必ずしも青年らしい特色があらわれているとはいえないのではないかと思います。もっと青年らしいところがあってもよい、いろいろな事を勉強していこうと考えてもよいと思います。しかし、それは本人の意識ばかりでなく環境、まわりの問題でもあり、その辺が日本の企業の雰囲気であるとも言えましょう。

(つづく)